
幸せについて

津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せについて

【著者名】

津風

NZ-1-1
N9794M

【あらすじ】

逃亡する犯罪者の男と、盲田の少女の物語。

(前書き)

書き下ろし。

現在書き終えたはずのオムニバスに追加したいな、と思つて書いた作品です。

むしろ、第一弾でもいいのかもー。

陽の差し込まない部屋で、彼女は一人きりだつた。

「誰？」

「あ、いや、別に怪しい者じゃないんだが……」

慌ててそう口にしても、彼女はこちらを見ようとほしない。

「何の用？」

「えっと……」

隠れる場所を探してた、とは言えなかつた。怪しまれたら、そこで何もかもが終わりだ。

「お讓ちゃんは、ここに一人で住んでいるのかい？」

「家政婦が一人いるわ。今は買い物に出かけているの」

「あ、ああ、そう……」

ちらりと外の様子を確認し、俺は言つた。

「しばらく、ここに居させてはくれないかな？」

「何故？」

「何故って、そりや……お、俺さ、旅人なんだ。こつ見えても」
そつと彼女の方へ近寄つてみると、俺はある事に気が付いた。

「……お兄さん、良い声してるわね」

と、彼女が虚ろに手を差し伸べる。それはそつと俺の身体に触れて、頬へと到達する。

「悪いが、もうお兄さんなんて年じゃねえんだ」

「そうなの？」

彼女が声だけで首を傾げる。俺の顔に触れる両手は小さく、纖細なガラス細工のようだつた。

「わたし、よく間違えるの」

彼女の世界に映像が無いことを、俺はその時、初めて知つた。

「ズイラ」

彼女の一日は長い。陽が昇つて数十分後に目覚め、朝食を作る。

「美味しい?」

「ああ、美味しいよ」

匂いと感触だけで作られた料理は、これが意外な事に美味かつた。
今日は昨日の続き、聞かせてくれるんでしょう?」

「ああ」

それから年老いた家政婦がやつてくる。家政婦は彼女の出来ないことを一通りこなしてから、買い出しへ出る。

「わたしも行ってみたいなあ。海なんて、行ったことないんだもの」
彼女はその一日のほとんどを家中で過ごす。外へ出るのは、家政婦と共に散歩へ行く時だけだという。

「ねえ、ズイラ。この家を出たら、次はどこへ行くの?」

彼女の素朴な問いに、俺は嘘をつく。

「そうだな。首都の方にでも向かうか」

「そこには何があるの?」

「何だつてあるさ。デパートはあるし、レストラン、公園、何だつて揃つてる」

「それじゃあ、その次は?」

「ん、まだ考えてねえよ。俺の旅は気まぐれだからな」

金色の瞳をキラキラと輝かせ、彼女は言う。

「良いなあ、ズイラは」

俺は少しの間、口を閉じていた。同じ種族の、同じ地方の出身なのに、彼女と俺とでは全く違う。

「なあ、サンナ」

「何?」

「お前……神を信じるか?」

彼女は押し黙ると、やがて歌つようと言つた。

「わたしは幼い時に事故で両目の視力を失った。義務教育は卒業したけど、社会に出ることが出来ないからと、この家に閉じ込められ

た

「……サンナ」

「一日を終えるたびに、わたしはいつも孤独を感じてた。けれども、あなたが現れた」

「……」

「ズイラはわたしの大事な友達。あなたが来てからは、わたし、一度も孤独を感じないの。それどころか、朝が来るのを楽しみにしてる」

「うん」

「だから、神様はいるわ。ズイラはわたしにとって、神様からの贈り物よ」

そして彼女は笑う。

俺は胸が苦しくなって、自分を責めた。純粋すぎる彼女を騙し続けるのは、もう限界だった。

けれども、彼女の元を去ることはそれよりも残酷に思えた。

家政婦が、言う。

「あの人です。ほら、顔がそつくり」

狭い家にすかずかと入り込んでくる男たちは、俺だけを見ている。

「ズイラ・クリムだな」

背後にいる彼女は、ただ口を閉じていた。

「殺人の罪で逮捕する。逃げても無駄だ」

「……クソ」

とつさに彼女を人質にとり、テーブルに置かれていた果物ナイフを突きつける。

「ズイラ……？」

「俺、本当は犯罪者なんだ」

彼女がはっとする。しかし、次に聞こえた言葉に、俺は耳を疑つ

た。

「……逃げて、このまま」

サンナを連れて逃亡「しろ」というのか。

「彼女を放しなさい！」

そんなこと、できるわけがなかつた。彼女にはまだ両親がいるし、兄弟だつているはずだ。それなのに、こんな俺と一緒にいることが許されるはずない。

「……俺はさ、こいつらに家族を見殺しにされたんだ。だから復讐をして、ずっと逃げ続けていた」

「わたしと変わらないわ」

「違うさ、全然。俺は人を一人殺してる」

彼女の首に向けた刀身は震えていた。 そうさ、あの時もそうだつた。俺は震える手で仇を殺した。それからもずっと震えが止まらなくて、隠れる場所を探してた。

「わたし、知つてたわ」

「何を？」

「ズイラも、わたしと同じで、この世界に一人ぼっちなんだって」

彼女の小さな手が俺の手に触れる。

「いいのよ、わたしはどうなつたつて。だつて」

「神なんかいねえよ」

「え？ どうしてそんなことを言うの？」

「だつてさ……神がいたら、俺もお前も、出逢つてないだろ

「神様がわたしたちを引き合わせてくれたんじやなくて？」

「違う。俺は……神なんか信じねえ」

「神様なんて、本当はいない

サンナの言葉が胸に刺さる。赤い血が世界を濡らす。

「サンナ……？」

実際に刺さったのは、彼女の首に当たたナイフだった。

彼女は自分で首を切つていた。震える俺の手は、まだ彼女と触れている。

「サンナさま！」

家政婦が悲鳴を上げる。

ぐぐつと力を込めて、彼女が最期にナイフから手を放す。

「……あ、ああ」

震える手は、すぐに男たちに取り押さえられた。俺は状況を理解できないまま、無意識に叫んでいた。

「殺してくれ！ 今すぐっ、俺を……！」

彼女の消えた世界に、光はなかつた。

「頼まれなくとも殺してやる」

床に滲む赤を見つめていた。あの日、まるで世界に一人ぼっちでいるような顔をしていた彼女を、見ていた。

「さ、サンナ……っ」

俺の顔に触れた小さな手を、嬉しそうに俺を呼ぶ唇を見ていた。頭に冷たい感触がぶつかる。もう何も見えない世界で、その感触は俺の全身を巡る。

「ズイラ・クリム、最期に何か言い残したいことはあるか？」

俺は二人の人を殺めた。一人は憎い相手、もう一人は……サンナ。

「今度は、幸せになろう」

火薬の匂い、震える手。遠のいていく意識の中、俺はずつと、彼女のことだけをおも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794m/>

幸せについて

2010年10月8日13時40分発行